

(3) 花き

切り花の冬期の標準管理温度

(並河)

種別	昼温 (°C)	夜温 (°C)	備考
カーネーション(大輪) (周年)	20	12	
〃 (初期)	18~20	10~12	
〃 (スプレー) (周年)	18~20	10~12	
〃 (短期)	20	10~12	10節までは夜温 8~9°C
ばら	23~25	15~18	品種による
きく	25以下	14~18	
宿根かすみそう	22以下	8~10	草丈 20cm までは夜温 15°C 若苗利用は夜温 15°C
アルストロメリア	20	5~10	
スターチス (シヌアータ)	25以下	8~10	
〃 (Hyb)	25以下	10	
きんぎょそう	20以下	5~7	
スイートピー	18	5~7	曇天日は低め
トルコギキョウ	25	13~15	
テッポウユリ	25以下	15~18	
アジアンティック (Hyb)	25以下	13~15	
オリエンタル (Hyb)	25以下	15	
チューリップ	25以下	14	
はなもも	20	20	
ゆきやなぎ	25	5	

<きく>

- ・ 品種により温度反応が異なる。
- ・ 栄養生長期中の低温管理 (温度不足) によって消灯から収穫までの期間が長くなり、栽培期間中の燃料使用量は多くなる。
- ・ 日中 (朝夕を含む) の極端な換気は、開花遅延の原因になる。
- ・ 生育ステージごとの最低夜温を下回らないように注意する。
- ・ 開花遅延、高所ロゼット化を招く栄養生長期の低温は一般的に 10°C が目安となるが、絶対的なものではなく、品種特性や植物体の状態 (温度前歴、栄養状態) によって異なる。現在普及している「神馬」、「精興の誠」などは 12°C を目安とする。
- ・ 秋ぎくの花芽分化は、多くの品種が 15°C 以上で行われる。



<ばら>

- ・ばらの生育適温は、昼間 25℃前後、夜間 16～18℃で比較的高温性である。夜温 16℃より低くなるにつれて、大部分の品種は、収穫量が少なくなり、ブラインドの発生が多くなる。
- ・赤色系品種では、ブラックニング（黒変）が生じやすい品種は、低温管理に適さないので注意する。
- ・花芽の発達初期に 12℃以下になるとブルヘッドが発生し、商品価値を損なう。品種によって発生差があり、高温性品種で一般に発生しやすい。
- ・冬期休眠させる場合には、徐々に温度を下げる（1週間で 5～6℃）。

<カーネーション>

時 刻	日没～22 時	22 時～日の出	日の出～日没
温 度	12℃	8℃	20～25℃

注) 加温開始温度：4 段サーモスタットの設置により調節

- ・品種によって差があるが、一般的には最低夜温 10～12℃を基準として管理する。
- ・日中の高温管理は品質を低下させるので、適温範囲内で管理するよう注意する。